

下関・梅光学院

人格否定し退職強要

ブレインアカデミーの「研修」実態

五年前の録音から 今明かされるその手法

下関市にある梅光学院（大学、中学校、幼稚園）で二〇一五年一月に中学校の四〇歳以上の教員に対し、ブレインアカデミーによる退職勧奨といえる研修がおこなわれ、多くの教員が学院を去った。この研修から昨年一月でちょうど五年がたった。梅光学院と深い関係のある大阪府の追手門学院ではその約半年後に同じくブレインアカデミーによる研修がおこなわれ「腐ったミカン」などと人格否定する言葉で執拗に退職を迫られたとして、男性職員ら三人が大阪地裁に追手門学院理事長やブレインアカデミーなどに総額約二二〇〇万円の損害賠償を求める訴訟を起こしている。じつは、梅光学院中学校の教員を対象にした研修会の録音も存在する。教員たちを精神的に追い詰めた研修がどのようなものだったのか内容を聞いた。

分が何を要する必要があるのか、客観的かつ多角的に検証すると位置付けている。初日は、「人の目を見て話聞けよ」と怒鳴り、顔を上げると「その目はなんだ」と怒鳴ったり、教員の発言をとらえて嫌味な人格評価をするなど、特定の教員に狙いを定めて人格否定がおこなわれたと参加者は話している。残念ながら録音が存在するのは二日目のみだ。二日目は罵倒する場面はなく、一日目とうって変わって柔らかい口調だ。初日にシヨックを与え抵抗する気力を削いだうえでものとみられる。

二日目は「自責」と「他責」の深層心理を深めるといった内容でおこなわれている。とうとうと話すかと思えば突然間を置き、囁き声や強い口調など強弱をつけながら、量

みかけるような口ぶりでも約五時間（発表の時間も含む）。野口英世やヘレンケラー、あいだみつをなど、有名な人々や一、二歳児のエピソードを織り込みながら、心理カウンセラーのように話しているもの、じっくり聞くと一つ一つの内容にそれほど深い教訓が含まれているわけではない。

「雨はあなたのやる気をそぐために降っているわけではなく、雨は雨として降っているだけかもしれない。（略）あなたが学院に出勤する途中のなかで、あなたがたまたま傘を忘れたときにあなたに降り注いだだけで、雨はあなたのやる気をそぐために降っているわけではないかもしれない」

「雨はなにも決めないんです。自分の心が決めるんです。そういう当事者意識の深みの問いかけがないと、雨が降っている

長時間攻撃 精神破壊

天候を引き合いに出した「当事者意識」と「他責の軸足」の違いについての解説が前半は長時間展開されている。これは梅光学院の厳しい状況を「経営陣の責任」と考えるか「自分の責任」と考えるか、につながり、

「今回学院の再生に向けて提示された五項目に関して、提示されなくても私は最低でも九〇点はやってきています」といい切れる人がだれかいますか？ 最低でも九〇点は自律的・自発的に苦しみながら喜びながら一教員としてやってきますか？ 正しい切れる人いますか？ ということ」

「今年度末、自己評価はどうですか。一〇〇点満点、パーフェクト、学院や周囲もそれに値するという評価や成果をつくり出す覚悟や決意や具体的なその後の準備がどのくらいありますか、ということですよ。ま、五点が二〇点くらいは上がるでしょ。三〇点の人は三八点くらいにはなるかもしれない。でも一〇〇点満点には程遠いでしょ」

「安易に周囲に原因を求めないという姿勢、この当事者意識の軸足にどう踏ん張って、この観点から厳しく謙虚に反省しながら、場合によっては心にもいつ辞表を持ってうまくいかなかったら潔

梅光学院中学校では四〇歳以上を対象にした希望退職に応じる教員が一人に及ばなかった時点でブレインアカデミーによる「再就職斡旋の説明会」が開かれた。さらにまだ辞表を提出していない教員約一〇人が集められ、二日間（一日五時間、計一〇時間）の「キヤリア再開発」と銘打った研修会が開かれた。

講師はブレインアカデミーの西條浩という人物。中野学院長、樋口学院長、只木統括本部長（当時）、村田中学校教頭、辻野秘書、ブレインアカデミー今井茂社長計七人にとり囲まれるような座席配置で、追手門学院の場合と同じく窓のカーテンはおろされ、外が見えない状態だったと参加者はふり返る。初日は、

「自責」と「他責」の深層心理を深めるといった内容でおこなわれている。とうとうと話すかと思えば突然間を置き、囁き声や強い口調など強弱をつけながら、量みかけるような口ぶりでも約五時間（発表の時間も含む）。野口英世やヘレンケラー、あいだみつをなど、有名な人々や一、二歳児のエピソードを織り込みながら、心理カウンセラーのように話しているもの、じっくり聞くと一つ一つの内容にそれほど深い教訓が含まれているわけではない。

「雨はあなたのやる気をそぐために降っているわけではなく、雨は雨として降っているだけかもしれない。（略）あなたが学院に出勤する途中のなかで、あなたがたまたま傘を忘れたときにあなたに降り注いだだけで、雨はあなたのやる気をそぐために降っているわけではないかもしれない」

「雨はなにも決めないんです。自分の心が決めるんです。そういう当事者意識の深みの問いかけがないと、雨が降っている



「自責に軸足を置いてい
る人」は給料が低く厳し
い仕事でも喜んで生き生
きとやるものだ」と刷り込
んでいく構成になっていた
。また、年度末を期限
にした「必達五項目」を
達成できる人は研修を受
けている教員のなかには

く学院を去る、あるいは
その仕事からはずれるく
らいの覚悟を持って、逃
げ道を絶って「なせるこ
と・できること」をこれ
までになさってきていた
としたなら、少なくとも
九〇点はいきますよとい
切れると思いますよ」

「今現在五〇点、六〇
点の人は厳しいですね。
厳しいというのは自分で
わかっているでしょ。三月
末までに五項目一〇〇点
満点、何が何でもとると
いうような覚悟がみなさ
んから今にも伝わって
こない。今よりも若干の
スキルアップはあるでし

おらず、「梅光学院以外の
新たな選択肢を考えてみ
るのも一つの道だ」とい
う結論になっている。

よう。必死に勉強されな
がらね。でも、もともと
の今の自己評価が四〇
点、五〇点、六〇点だ
と、よくいって七〇点で
しょ。土台がその程度で
すよ。それはみなさんが
当事者意識よりも他責、
被害者意識の深層心理に
軸足を置いてきたのが今
の中途半端な成果です」

たときこそ、(略)自分
の当事者意識の真価が問
われますよ。あなたの当
事者意識はなんぼのもの
ですか。この程度の試験
やこの程度の苦い局面の
なかで吹っ飛ばすような当

事者意識ならその程度だ
ということですよ」

このような教員の能力
・意欲を否定する言葉が
続く。さらに研修をへた
一人一人の発言を受け
て、「一定の評価はさせ
ていただきます。しか
し、やっぱりね甘いん
ですよ。少なくとも私には
訴えてこない。響いてこ
ないんですよ」「決然と
した厳しさに立ち向かう
迫力も足りない。私が梅
光学院中高校の存続・再
生発展に最高の結果責任
を持っている立場の人な
らば、この人と一緒に
苦しみ、喜びながらやっ
ていきたい。だからちよ
っと力を貸してよ」とい
う方は誰一人いないと、
率直に思っている。この
ような一つの転機・機会

を通過して、本梅光学院以
外の選択肢も視野に入れ
てみるということも率直
に必要じゃないかなとい
う感じを持っておりま
す」とのべている。
締め挨拶をした中野
新治学院長も、「昨日か
ら大きな声でバーンと叱
られることも含めて、そ
ういうことを私はこれま
でしていません。本当
にそれこそ当事者意識が
あったのかということ
だ」と反省の弁をのべた
うえで、「終わりません
という」と、このよ
うな研修が続くことを示
唆。「本当に茨の道をとも
に歩んでくださるか、そ
れは無理されることはな
い。いろんな生き方があ
るわけだが、本当にそう
なのかを問いかけられた

のだと思う。そういうこ
とも含めてもう一度よく
受け止めていただきた
い」と暗に辞表を提出す
ることを要請している。

この研修を経て学院の
希望通り自主退職が出そ
ろった。「必達五項目」
は脅しに過ぎなかったよ
うで、辻褃合わせのよう
に翌年二月には残留する
教員を対象に初めて科目
ごとの職員テストがあっ
たという。

フレイシアカデミーは
この人員削減プログラム
を基本料金三〇〇万円プ
ラス一人八〇万円の成功
報酬で契約していたとい
われている。さらに次の
職業を紹介することで紹
介料も得ることができ
る。こうしたコンサルは
「労働力流動化」政策の
もとで暗躍するようにな
ったといわれ、他の業種
でも似たようなケースが
起こっている。追手門学
院の裁判をはじめとし
て、実態を明らかにす
ることが求められてい
る。